

嫌われ令息に成り代わつた俺、
なぜか過保護に愛でられています

黒猫

ヴィアン大公家に
突然現れた。

セドリック

ユリスに忠実に
仕えている従者。
寡黙で感情を
表に出さない。

オーガス

気弱で頼りない性格の
ユリスの長兄。
ユリスの突飛な行動に
戸惑うことも。

ブルース

厳格で威圧的な雰囲気を
持つユリスの兄。
弟であるユリスのことを
気にかけている。

アロン

ブルースの付き人を
務めるチャーチの騎士。
ユリスに優しく接する。

character

ティアン

ユリスの遊び相手として用意された少年。
ユリスの型破りな行動に振り回される苦労人だが、
なんだかんだで世話を焼いてしまう。

ユリス

ヴィアン大公家の三男。
突然、冷酷で我儘な
絶世の美少年「ユリス」に
成り代わってしまった主人公。
成り代わりがバレないよう
穏便に過ごそうと奮闘中。

プロローグ

はつと気がついて目を開けた。

どうやら居眠りしていたらしい。うんと伸びをして、変に着心地の悪い衣服に眉を寄せる。全体的に硬く、普段着には到底向かない生地だと思う。こんな服、持つてたつけ？ 傾げた首は、徐々に目の前の現実を理解してピシリと固まつた。

「……え？」

思わずこぼれた小さな声にぎょっとする。

まるで声変わり前の少年のような高い声。喉元に右手を添えて、目を見開いた。

俺つてこんな声だつたつけ？ 俺はいつも通り――

あれ。いつも通りつてなんだっけ？

頭の中に靄がかかつたみたいに思考が停止する。なにかを思い出そうとするが、なにも思い出せ

ない。けれども、この状況が俺の「いつも通り」でないことだけは確かだ。

ひと言で表せば、きらびやか。

広々とした室内は清潔感にあふれ、上質なことが一目でわかる洗練された空間だ。床には毛足の長い高級な絨毯が敷かれ、俺が腰掛けている椅子も気品に満ちている。はつきり言つて居心地が悪い。

なにここ？ 高級ホテル？

座つたまま呆然としていると、横から白手袋に包まれた、しなやかな手が伸びてきた。

力チャリと軽い音を立てて、ティーカップがテーブルにのせられる。

「つ！」

人がいたことに驚き肩を揺らすと、なぜか手の主も小さく息を呑んだ。

「申し訳ありません、ユリス様」

すぐさま飛び出した謝罪の言葉。

おそるおそる右側に目を遣ると、強張つた表情の青年が直立不動の姿勢でいる。

二十代前半くらいか、明るめの茶髪が目を惹くお兄さんだ。執事服のようなものに身を包んだ彼は、その優しげな顔を困ったように歪めている。

「誰!?」

心からの疑問を口に出すと、お兄さんの顔色がみるみる悪くなる。しかし、すぐに表情を引き締めたのち、深々と頭を下げる。

「申し訳ありません。お世話になりました」

お兄さんはそのまま迷うことなく部屋を出た。

俺はその姿を見送つて、「え？」と立ち上がる。

いや待つて。置いていかないで。お世話になりましたって、なに。この状況で一人にされても困るつて。

慌ててお兄さんを追いかけて、重厚なドアを開け放つ。

視界に飛び込んできたのは、美術館なのではと疑いたくなるほど豪華絢爛な空間だつた。隅々まで清掃も行き届いており、僅かな隙もない。長い廊下には同じデザインのドアがずらりと並んでいて、いかにもファンタジー世界に登場しそうな豪邸だ。

絶対に俺の自宅ではない。現代日本では早々お目にかかる上品な空間に、一瞬だけ二の足を踏む。土足で歩いて怒られないだろうか。

だが、考へてゐる暇はない。長い廊下の先に、先程のお兄さんの背中を見つけた。俺が今どういう状況に置かれているのか。それを知るためにも、あの人だけが頼りだ。

「あの！ ちょっと！」

声を張ると、お兄さんがビクッと足を止めた。その怯えるような仕草はなんだ。

自分の声に違和感を覚えながらも、お兄さんの前まで走つていく。妙に視線も低い気がして、首を捻りつつ、強張つた表情のお兄さんを見上げた。

「……えっとお」

対面したはいいが、続く言葉が出てこない。

そもそもこのお兄さんは誰なんだ。まじまじと顔を眺めてみるが、見覚えはない。雰囲気的に友人や家族ではないだろう。態度がよそよそしい。

呼びかけたにもかかわらず、用件を言わない俺のことをどう思つたのか。小さく頭を下げたお兄さんは、怯えた表情で懐からなにかを取り出した。

「えっと、これは……？」

細長い形状の物である。意図が読めずに硬直していると、こちらに寄つたお兄さんが無言で力バーを外した。現れたのは、小型のナイフ。アウトドアで使うような持ち運びが容易なタイプ。

なぜ、今これを？

視線が合うたび、お兄さんがわかりやすく動搖する。

「自らの処分を勝手に決めるなど、おこがましい真似をいたしました。どうぞご随意に」

どうぞと言われても、まったくわからない。

眼前的のナイフとお兄さんを交互に見て、お兄さんの出方を窺う。話の流れ的には、彼の処分に関することなのだろう。処分ってなに。なにがどうしてそうなつた。

視線で問いかけるが、彼は困ったように「どうぞ」と繰り返すだけ。その声は、これ以上ないくらいに緊張を含んでいた。

この意味不明な会話から抜け出そうと、彼から視線を外したその瞬間。

「え？」

その刃先の行方を理解して、咄嗟にお兄さんの腕を掴む。なんだか不思議な身長差があるため、掴むというよりはしがみつくような格好になつてゐるが。

俺つて、こんなに身長低かつたつけ？

大人と子供くらいの差があるような。いや、そんなことより。

「危ないよ！ なにしてるの！」

自らの左腕を狙つていたお兄さんは、俺が飛びついたことでナイフを落とした。

「な、にを」

驚愕する彼は、慌てた様子で俺から距離をとる。これでもかと見開かれた目が、俺のことを上から下まで観察している。

二人して立ち尽くしていると、「おい！ なにをしている」という鋭い声が飛んできた。突然の大声に肩を揺らす俺とお兄さん。

声のした方向へ顔を向けると、近づいて来る人影を発見した。

癖のない黒髪に、意志の強そうな鋭い目。がつしりとした体格も合わさって変な威圧感がある。シンプルな、けれども上品なシャツを着込んだお兄さんだ。なんというか、怖そうな人だな。

「どちら様ですか？」

とりあえず丁寧に接してみる。なんだか怒らせたら厄介そうだと思ったのだ。

しかし、そんな俺の努力も虚しく黒髪お兄さんは「あ？」と物騒な声を発する。

「おまえの兄だろが！ ふざけたことばかり言うんじゃない」

「……兄？」

「はい？ なにそれ。

ぽかんとする俺に、兄を名乗る人物は忌々しそうに舌打ちをした。その物騒な態度に、思わず首を竦める。やつぱり怖い人だ。

「そんなことより授業はどうした。家庭教師が来ている時間だろう」

授業？ 家庭教師？ 身に覚えのないことばかり羅列されて、なにがなんだか。

そんな俺の背後で立ち尽くしていた茶髪お兄さんが、弾かれたように頭を下げた。

「家庭教師は先日解雇いたしました」

「何度も教師を変えれば気が済むんだ。我儘もいい加減にしろ」

「申し訳ありません」

なぜか茶髪お兄さんが謝罪の言葉を口にする。怖そうなお兄さんは、俺に対して文句を言つたよう見えたけど。これはなんというか、うん。

ぼんやりと感じていた異変は、もはや無視できないほどになつていて。

険しい雰囲気の二人からゆっくり離れて、目についた窓に視線を向けた。そこに映り込んだ影は

三つ。黒髪の怖そうなお兄さんと、頭を下げる茶髪のお兄さん。そして――

「なに、これ。え、誰？」

窓に手を添えて、映り込んだ三人目を凝視する。俺が手を上げると、窓にうつすらと浮かんでいる人影も同様の動きをしてみせる。

「お、俺え？」

子供だ。どう見ても小学生くらい。いやいや、ちょっと待つてほしい。

両手で頬を包み込む。なにも思い出せないとは言つたが、この姿は絶対に違つ。俺はどこにでもいる平凡な高校生で――

第一章 成り代わった

どうやら俺は、まったくの別人に成り代わってしまったらしい。

前世（？）の俺は平凡な男子高校生だつたはず。とはいゝ、記憶はぼんやりとしていて、前世での名前なんかはまったく思い出せない。高校生という記憶が本当に正しいのか判別もつかない。だが、この世界が見慣れない場所であることは間違いない。同時にこの小さな体も。今の俺は、端的に言うと絶世の美少年。

漆黒の髪と瞳は前世とそう変わらないが、いかんせん顔の造りがお見事だ。一つ一つのパーツが美しく、その配置も完璧。クールな面持ちで、黙つていれば陰のある美少年にしか見えない。

年齢は小学生くらい？

身に纏う衣服は高級品で、どこの貴族たつて言うくらいに装飾が付いている。無駄に胸元がひらひらした白いシャツに緑っぽい生地の厚いジャケット。うん、非常に動きににくい。

とりあえず、どこかの世界の美少年に成り代わつてしまつたらしい。それはいいのだが（いや、よくはないか）、俺は今、非常に困つた立場にいる。

普通こういうのつて、前世の記憶があるものじやないの？

それか前世で読んでいた漫画の世界に転生とかさあ。前世の記憶を武器に無双するのが定番なんじやないのか。

しかし残念なことに、俺はこの体の持ち主に關する情報を一切持ち合わせていない。

はつと気がついたら、見知らぬ美少年だった。ついでに前世の記憶もほとんどない。

なんて不親切設計。突然まつたくの他人として生きろなんて難易度高すぎる。すでにリタイアしたい。

茶髪お兄さんの言葉を信じるのであれば、今の俺は『ユリス』という名前らしい。「ユリス様」と呼ばれているので、おそらくいとこのお坊ちゃんなのだろう。

俺が記憶喪失なだけという可能性もあるけど、あまり期待はできない。うつすら現代日本の記憶

があるからな。

さらに、うまく言葉にできないが、この小さな体にも違和感がある。これは絶対に俺の体じゃない。

元の世界に戻る方法が不明な今、俺はこの美少年として生活していく他にないようだ。

だつてこういう異世界には、現代日本とは異なる常識がある可能性が高い。

俺が不審な行動をすれば、変な理由をつけて処刑されるかもしれない。治療という名の監禁コースに進む可能性だつて否定できないのだから、記憶喪失を疑われるのもまずい。

だからここで取るべき行動はただ一つ。

みんなに怪しまれないよう、ユリスくんになりきるしかない。

ユリスくんをうまいこと演じられれば、身の危険だつて回避できるはず。

そのためにも家族と仲良くしておいて損はないだろう。

とにかく、まずは情報を集めないと。

このユリスくんとやらが家庭教師を解雇した件について、いまだにあれこれ言つている黒髪お兄さんは、ユリスくんの兄らしい。一方的に責められる茶髪お兄さんが可哀想に思えてくる。

黒髪お兄さんとユリスくんが兄弟なのであれば、俺も彼の弟っぽく振る舞う必要がある。自然な感じで弟をやらないとな。気合を入れて、二人の間に割つて入る。

「お兄様！」

窓にちらつと映り込んだ容姿を見る限り、ユリスくんは育ちのよろしいお坊ちゃんだ。きっと兄のこともお兄様呼びしているに違いないと声を上げると、なぜか黒髪お兄さんがぎょつとする。

「なんだ、突然。これまでお兄様なんて呼んだことないだろ」

お兄様呼びじゃないのかよ、ユリスくん。こんな美少年なのに？

慌てて笑顔で誤魔化すが、茶髪お兄さんも怯えたように半歩下がつてしまつた。

想像していたものとは、かなり反応が違う。どういうことだよ、これ。

「具合でも悪いのか？」

兄様の問いかけに、慌てて首を左右に振る。お兄様は丁寧すぎたかも。兄様呼びでいいや。

手探り状態で突き進むしかない現状に、早くも限界を感じている。これ以上、下手なことを口走ると危険だ。身動きの取れない俺が焦つていると、幸いにも兄様が動いてくれた。

「ところで、ジャンを解雇するのはやめたのか？」

ジャンって誰だよ。

茶髪お兄さんに視線で助けを求めるが、俺の視線をガン無視して緊張の面持ちで固まるだけ。

「ジャンって、誰だっけ？」

仕方がないので、素直に質問してみる。堂々としていれば、なんだかいける気がしたのだ。

「なんだ。解雇したのか？」

勝手に会話を続けてくれる兄様。一方、茶髪お兄さんの優しそうな顔は見る見る青くなる。

「も、申し訳ありません……！ 私の察しが悪いばかりに大変なご迷惑をおかけいたしました。お世話になりました」

早口の謝罪と共に、茶髪お兄さんが勢いよく頭を下げた。そして、淡々と紡がれた挨拶に、今度は俺が顔色を悪くする。

え、なにこれ。これじゃあまるで茶髪お兄さんが辞めるみたいな——

はつと閃いた。

「ジャン？」

「はい、ユリス様」

おそるおそる問いかけてみると、すっかり青ざめた茶髪お兄さん、もといジャンがおずおずと返事をした。

これはまずい。見たところ、ジャンはユリスのお世話係みたいな人だろう。ただでさえ知らない世界に来てしまつたのに、ここで一人にされるのは困る。

慌てて解雇するつもりはないと説明すると、ジャンは困惑しながらも頷いてくれた。兄様は「なんだ？ 結局どっちなんだ」と苛立つたように腕を組んでいたけど。

ジャンは、ユリスの従者らしい。ユリスの身の回りの世話を一手に引き受けているようだ。

怪訝な顔の兄様から逃げるよう別れて、部屋に戻る。初めに目を覚ましたこの部屋が、ユリスの自室らしい。いかにもお金持ちっぽい広い部屋だ。

備え付けの鏡と向き合つて、うーんと頭を悩ませる。

どこからどう見ても完璧な顔。さらっとした黒髪も相まって、クールな美少年だ。

己の新しい顔に魅入つていると、背後に音もなく立つたジャンと鏡越しに目が合つた。

「うわっ」

「失礼しました」

驚きを誤魔化そうと、思わず眉間に力を込めるが、ジャンはさつと表情を曇らせてしまう。

「申し訳ありません。どうぞ隨意に」

差し出されたのは、先程廊下に転がしたはずの小型ナイフ。ご丁寧に拾つてきたらしい。

無言の俺に、ジャンは根気強くナイフを差し出してくる。なにこの人。普通に怖い。

「どこでも構いませんよ」

しまいには、無表情で袖を捲り始める。

「どういうことなの？ ナイフで刺せつてか？ するわけないだろう、そんなこと。

だが黙つていれば、痺れを切らしたジャンが自らナイフを振り上げる可能性もある。それもだいぶ怖い。どうやらジャンはちょっと困った性癖をお持ちらしい。趣味嗜好なんて人それぞれだけど、俺を巻き込むのはやめてくれ。

仕方がないので、俺はナイフを受け取つた。途端に、ジャンが覚悟を決めるように唇を噛み締める。やめて、そんな目で俺を見ないで。まるで俺が悪いみたいじゃないか。

「……これは必要ないです」

緊張のせいで強張つた声になつてしまつた。

だが、ジャンは俺よりも緊張していたらしい。さつと俺の手からナイフを取り上げると、今度はきちんと懐かたにしまつてくれた。

「大変失礼しました」

「い、いえ」

ぎこちない笑みを浮かべたジャンは「私に対しても敬語は不要です」と言い添える。

確かに、従者に対しても敬語は必要ないのかもしれない。

「ところで、さつき廊下で会つたあの、ほら」

兄様の名前を聞き出そと奮闘してみると、ジャンが不思議そうに首を傾げる。

「ブルース様が、なにか——」

「そう！ ブルース兄様！」

ジャンを遮つて「よつしや！」と小さく拳を握る。これで兄様の名前は把握できた。

訝しむジャンには「なんでもない」と笑つて誤魔化しておく。

他にもユリスに関する情報を集めなければならない。

壁際で直立するジャンに見守られながら、室内の扉という扉を次々と開けてみる。

最初に俺がいた部屋は、中央にテーブルセットが据えられ、応接間のような装いだった。部屋の

奥にはもう一つドアがあり、こちらは寝室。

どちらの部屋も豪華だが、全体的に物が少なく生活感に欠ける。しかし、それはうまく収納されているおかげ。

壁に沿つて据えられた棚の中には、使い道不明の小物がこれでもかと詰め込まれている。異世界アイテムっぽくて楽しい。

しばらく夢中であさつていた俺は、バタンという無機質な音を耳にして視線を滑らせる。いつの間にか、ジャンが隣に移動してきている。俺が散らかした側から、片付けて回っているらしい。なんかすみません。

謝罪の意味を込めて小さく頭を下げるが、ジャンは大袈裟^{おおげさ}に肩を揺らした。なんだろう。この不穏な空気。またナイフを差し出されても困るので、早々に視線を外す。ジャンは些細なことで加害を要求してくる危ない人だ。俺には他人をいたぶる趣味はない。「なにか探し物でしょうか。必要があれば私が探しておきますが」「あ、いや。そういうわけじゃ」

「左様でございますか」

背筋を伸ばすジャンは、困ったように眉尻を下げている。探し物でなければ、どうして部屋を荒らしているのかとでも言いたげな雰囲気だ。

こほんと咳払いをして、中央のテーブルへ向かう。

すかさずジャンが椅子を引いてくれる。至れり尽くせりだ。座つたはいいが、地面に足が届かない。両足をぶらぶらさせて、背後に控えるジャンを見上げる。

ジャンは特別背が高いというわけでもない。身長差があるのは、俺の背が低いせいだ。

「俺つて何歳だっけ?」

冗談を装つて軽く問いかけるが、ジャンは僅かに瞠目^{どうもく}した。

「ユリス様は十歳でございます」

やはり小学生だ。小さいはずだな。

「ところで学校は?」

この世界、小学校とかあるのだろうか。

「学校へ通われるおつもりでしようか? しかし大公様が反対なさるかと」

大公様って誰? 俺の知らない単語を出さないでくれ。

それきり、ジャンは困惑顔で黙り込んでしまう。学校へ行くことについては大公様なる人物の反対に遭うから無理と言いたいらしい。

「……家庭教師は?」

ブルース兄様の怖い顔を思い出していると、「新しい家庭教師をすぐに手配いたします」との返答。

自分の部屋なのに酷く居心地が悪い。文字通りジャンが引っ付いて回るから気も抜けない。貴

族つてこんなに息苦しいの？

「今日の予定は？」

「特にございません」

世間話を好まないのか、それとも従者という仕事に徹しているからなのか。ジャンはそつけない。一問一答形式でしか会話が進まない。会話を強要すると、思い詰めた表情をする。それは俺としても不本意だ。結果、意思疎通がままならない。

まずは、この従者との付き合い方を探るべきかもしれない。本当は庭にでも飛び出したいのだが、俺の一挙手一投足にビクビクするジャンが可哀想で下手に動けなくなってしまった。

屋敷一階に位置するこの部屋からは、綺麗に整備された庭が見える。結構な広さがあるらしく、散歩するだけでかなりの暇潰しになりそう。噴水もあるようだ。ぜひとも見に行きたい。

そうして特に何事もなく、夕食の時間が近づく。

この家のルールがわからない俺は、時間が経つにつれてそわそわしていた。だが、「ご飯つてどうするの」と訊くわけにもいかない。怪しまれてしまう。

しかしその心配も早々に解消された。

ノックと共に入室してきたメイドさんが、手際よく食事をテーブルに並べていく。見れば一人分しかない。

食事中もずっと側にいるジャンは沈黙を守り、部屋の隅で控えるメイドさんも口を結んだまま。

しかし。

気まずいので一緒に食べないかとジャンを誘つてみたが、可哀想なくらいに顔を青くしていた。自身の咀嚼音^{そしゃくおん}がやけに気になり始めてからはもうダメだった。緊張のあまり、味はまつたくわからぬ。なんでこんなに注目されながら食べないといけないんだ。もしや食事は毎度こうなのだろうか。すごく嫌だ。

それでもなんとか完食して食後の紅茶^{だいしづ}を嗜んでいたときだ。

「あの、ユリス様」

「ん？」

緊張の面持ちで口を開くジャン。こんな子供を相手に、なにをビビる必要があるのか。

「ブルース様が新しい家庭教師を手配したと。いかがいたしましょう」

「早いね」

「はい。随分とユリス様のことを心配しておられるようでしたので」

ブルース兄様が、俺に家庭教師がないことを知ったのは今日の昼間だ。なんて迅速な行動。

しかし家庭教師が来てくれるというのはありがたい。なんせ俺は右も左もわからない状態なのだ。こちらの世界の常識を増やせるチャンスは貴重。授業開始は一週間後くらいになるそうなので、それまでには情報収集として屋敷の探索でもしよう。

とはいえ、幸いここで生活は快適そうだ。

現代日本のような技術はないが、明かりくらいはあるらしい。夕方になつて部屋に明かりが灯つ

たときはほつとした。

どうやら冬の始まり頃らしく外は肌寒いが、室内は快適な温度を保っている。風呂も着替えも全部ジャンが手伝つてくれたので、特に戸惑うこともなかった。

そうして迎えた成り代わり生活二日目の朝。

「遊び相手を用意してやる」

「お構いなく」

朝食の席に突入してきたブルース兄様は、偉そうに言い放つた。

「可愛いのない奴だな」

「はあ、どうも」

「褒めてはしない」

今日はなぜか背後に騎士を連れている。

短く切り揃えた髪は赤みがかっており、当然のように背が高い。涼しい目元が特徴的で、優しそうなイケメンお兄さんだ。目力が変に強い兄様とは対照的だな。

この家には、なんとお抱えの騎士団があるらしい。異世界の騎士と聞いて、わくわくしないわけがない。すごく興味がある。近々見学に行こう。

そわそわする俺に、ブルース兄様が怪訝な顔をする。ジャンに聞いたのだが、ブルース兄様は自

主的に騎士団の訓練に参加しているらしい。

やけに怖そうな人だと思っていたが、剣術を嗜んでいるからだろうか。要するに兄様は脳筋なのだ。俺の苦手なタイプ。

団々しく椅子を陣取つたブルース兄様は、当然のように俺と朝食を共にしている。

「……おい、音を立てるな」

ブルース兄様の話を聞き流しつつ朝食を食べていると、不機嫌な様子で言われた。

無茶言わないでくれ。ナイフとフォークなんて使い慣れていないんだ。カチャカチャ苦戦していると、ブルース兄様の顔がさらに険しくなる。

「フォークの持ち方がおかしい」

フォークに持ち方とかあんの？

「刃先を人に向けるんじゃない」

違う。これについては俺の前に勝手に座つたブルース兄様が悪い。俺が刃先を向けたんじやなくて、兄様が俺の刃先に回り込んできたのだ。

「おい、ジャン。おまえはどういう教育をしているんだ」

痺れを切らした兄様が、俺の背後に佇むジャンに鋭い目を向いた。俺はジャンに教育された覚えなんていけどな。

「申し訳ありません！」

オロオロするジャンが可哀想だ。俺がマナーを知らないのが原因なのだから。本物のユリスは生糸きつしのお坊ちゃんらしいからマナーも完璧なのだろう。だとしたら、ジャンは悪くない。助けてやねねばという使命感から、俺はフォークを置いた。

「ブルース兄様！」

「置き方が違う」

フォークの置き方つてなんだよ。そんなことまで決まつてるの?

折れそうな心を必死に鼓舞して、俺は咳払いをした。

「ジャンはその、あれなので。あんまり色々言わないであげてください」

「あれってなんだ」

それ訊いちゃう?

ちらりと背後のジャンに目線を送る。困った顔のジャンは、きゅっと唇を引き結んでいる。本人の前で言うのはちょっと。

だけど脳筋お兄様は配慮というものができない。早く言え、と鋭い眼光で急かしてくる。

ジャンはちょっと困ったお兄さんだけど、ユリスのために働いてくれている。俺が成り代わったばかりに迷惑をかけてしまっているのだ。

よし、ここはジャンの名譽のために黙つておこう。

決心した俺であつたが、「おい、ユリス」という低い声に呆氣なく口を滑らせてしまう。

「ジャンはちょっと困った性癖なので」

その場に居合わせた全員がピシリと固まつた。

ごめんよ、ジャン。だつてブルース兄様の目が怖すぎるんだもん。

「ユ、ユリス様?」

重苦しい空氣の中、真つ先に声を上げたジャンは震えていた。

青筋を立てた兄様が、乱暴にフォークを皿の上に放り投げる。品のない音が響いた。

「おい、ジャン」

「いや、あの、なんのことだかさっぱり」

「ブルース兄様。音を立てるのはよくない」

「おい、こいつを黙らせておけ」

ブルース兄様に顎あごで指示されて、控えていた騎士が寄つてくる。

「ユリス様。向こうの部屋へ行きましょうか」

「いや、大丈夫」

先に音を立てるなと言つたのは兄様なのに。俺らを一瞥した兄様は、次にジャンを見据えた。で? おまえは一体どういう流れで、うちの弟に困った性癖とやらを披露したんだ

あ、これはダメだ。なんか兄様が誤解している。多分工口い方向で考えてるな、この脳筋め。ですから、誤解です! そんなこと――」

「兄様。 そうじゃない」

「流石にジャンが可哀想なので助け舟を出す。 まあ発端も俺なんだけどさ。

「じゃあどうなんだ」

「えっと、だからその」

俺が庇つたことで目に見えて安堵するジャン。 よかつた。

ジャンを下手に追い詰めると、 またナイフを取り出しかねないからな。 そんなことを考えながら口を開いたから、 ついうつかり事實を語つてしまつた。

「たまにナイフで刺せつて言つてきます」

ジャンが顔を覆つた。 ブルース兄様が頬を引きつらせている。 騎士は視線をあらぬ方向へさつと向けた。 異様な空氣だつた。

「おま、 それは。 その、 どういう性癖なんだ」

「……違います」

ようやくそれだけを絞り出したジャンは、 ついに膝を突いた。 うん。 マジでごめん。 その後、 ジャンはブルース兄様に連れられてどこかへ行つてしまつた。 後で謝ろう。

部屋に取り残されたのは俺と騎士。

壁際に直立する彼は、 剣を持つていなかつた。 ちょっと残念。 間近で見てみたかつたのに。 暇を持て余した俺の視線は、 自然と騎士に向かう。

「ブルース兄様に付いて行かなくていいの？」

「いえ。 ユリス様を一人にするわけにもいきませんので」

「この人たちは、 俺をなんだと思つているのか。」

「俺は一人で大丈夫」

「いえ、 そういうわけには」

にこりと笑つて流される。 うーん。 柔らかな態度だが押しが強いタイプだな。

「名前は？」

とりあえずこのお兄さんとも仲良くなつておこう。

そう思つて尋ねると、 彼はゆつくりとこちらに歩み寄つて、 俺の傍に片膝を突く。

「アロンと言います。 よろしくお願ひしますね」

王子だ。 ブルース兄様よりも、 よっぽど貴族だ。

見惚れていると、 アロンはさりと俺の手を取つて軽く口付けてきた。 あ、 なんか動悸が。

くすりと笑つて、 アロンは再び壁際に戻つて行く。 その様子をじつと見つめていると、 アロンがくるりと振り返つた。

「あ、 そうだ。 ユリス様。 副団長の件、 私はいいと思ひますよ」

「ん？ うん」

意味深な流し目を送られて、 よくわからないが頷いておく。 なんだよ、 副団長の件つて。

「副団長がどうかした？」

うつかり尋ねてから、この質問はまずかつたかなと思い直す。偽ユリスであることがバレてしまふかもしれない。慌てて「なんでもない」と口にしようとするが、それよりも先にアロンが真顔になつた。

「失礼。余計なことを申し上げてしましましたね」

そう言つて作り笑いを浮かべるアロンは、俺から視線を外して黙り込んでしまう。え、なにその反応。そんなにまずい質問だった？　さすがにこれ以上の深追いはできない。二人して黙り込んでいると、ジャンとブルース兄様が戻ってきた。

「あまりジャンをいじめてやるな」

「いじめてない」

こちらを睨むブルース兄様は、俺が悪いと決めつけている。なにを言つたんだ、ジャン。そのまま兄様は、先程の椅子に腰を下ろした。なんでだよ。自分の部屋に帰れよ。

「おまえは色々と前科があるからな。ジャンが疑心暗鬼になるのも無理はない」

「なんの話？」

ふんっと鼻で笑つたブルース兄様は、長い足を組んで偉そうに「とぼけるな」とのたまう。どうしよう。脳筋お兄様との会話が成り立たない。

てか、前科つてなんだよ。失礼すぎるだろ。

「ブルース兄様は暇なの？」

出て行けと示唆するが、兄様は「そんなわけあるか」と眉をひそめるだけで動こうとしない。マジで察しの悪い人だな。

「俺は兄様と違つて忙しい」

つんと唇を尖らせて不機嫌アピールしてみるが、「おまえこそ暇人だろうが」と吐き捨てるような言葉が返つてくる。

「言つておくが、今度の家庭教師は俺が選んだからな。俺の顔に泥を塗るような真似はしてくれんなよ」

「はあ」

「なんだ。その気の抜けた返事は」

ブルース兄様の顔を立てようという気が起きないな。なんてこつた。

少し言い返してやろうと、俺は居住まいを正す。

「ブルース兄様も、少しは勉強した方がいいと思います」

「どういう意味だ」

「お父様の跡を継ぐんでしょう？」

俺に構つていでちゃんと働け。そんな思いを込めて睨み付けると、兄様が器用に片眉を持ち上げた。そして、冷たい声を発する。

「それはどういう意味だ」

「どうって。貴族の家って世襲制じゃないの？ 違うの？」

ジャンが「ユリス様……！」と悲痛な声を発する。なんでこんな絶望的な雰囲気になつたんだ。誰か説明して。

助けを求めてジャンを振り返ろうとするが、その前に兄様が「おい」と凄んだために叶わなかつた。怖いってば。

「なぜ兄上を差し置いて俺が跡を継がなければならぬ」
「……あに、うえ？」

鈍つた思考は、言葉の意味を徐々に理解していく。

いやいや、まだ兄がいるのかよ！ てつきりブルース兄様が長男だと。違つたんかい。そういうのはもうちよつと早く教えてもらわないと。

「そ、そういうばいたね。兄上」

「おい、ユリス」

「えつと。俺は忙しいので、これで失礼します」

「どこに失礼するんだ。おまえの部屋はここだらうが」物騒な声を出す兄様から逃げ出そうと、窓を指した。

「庭で遊ぶ予定がある」

「そんなものの予定とは言わん」

うまい言葉が出ず困つていると、音もなく俺の隣に移動してきたアロンが背もたれに手をかけた。

「まあまあ、落ち着いてください。ちよつとした言葉の綾ですよ。ね、ユリス様？」

優しく同意を求められて、こくんと頷く。なんて優しいお兄さんなんだ。王子様っぽい素敵な横顔を眺めて、彼の言葉にのる。

「そう。ことばのあや」

「おまえ、それ意味わかつて言つてんのか？」

相変わらず失礼な兄である。けれど、アロンの介入によつて毒氣を抜かれたらしく、兄様は額を押さえてしまう。

「兄上のなにがそんなに気に食わないんだ」

気に食わないもなにも、俺は長男には会つたことがないのだが。

だがその言い方に引っかかる。まるでユリスと長男が昔から不仲みたいな言い方だ。

「俺は兄上と仲良しですけど」

「嘘吐け。ろくに会いもしないくせに」

やつぱり。どうやら本物のユリスは、長男と仲が悪いらしい。場の空気は一瞬凍つたが、ユリス的には模範的な対応ができていたに違いない。ナイス、俺！

ほつと胸を撫で下ろす俺とは対照的に、ブルース兄様は深いため息を吐いていた。

俺がユリスに成り代わってから六日ほどが経過した。非常に順調である。多分。

「昼食後、ブルース様のお部屋に来るようになると言付かつております」

昼食が終わってダラダラしていた俺に、ジャンが告げた。そういうことはもつと早く言つて。こつちには心の準備とかあるんだよ。眉間に皺の寄った兄様との対面は気疲れするのだ。

じつとジャンを見上げると、わかりやすく表情を強張らせる。

ブルース兄様になにか言われたのか、あれきりジャンがナイフを差し出してくることはない。しかし相変わらずピクピクしているので、彼との付き合い方はいまだに模索中である。

兄様の部屋は、二階の一番奥。重厚なドアを前にして、しばし動きを止めた。後ろからドアをノックしようとするジャンの腕を掴むと、彼は大袈裟おおげさに肩を揺らす。

「俺がノックする」

どんどんとドアを叩けば、顔を覗かせたアロンが緩く笑つた。

「ユリス様。どうぞ中へ」

アロンはブルース兄様お付きの騎士らしく、常にブルース兄様の側にいる。あんな偏屈な兄様の

相手をさせられて、さぞかし苦労しているに違いない。

「今日はなにをされていたんですか？」

「庭で遊んだ」

「最近外遊びがお好きなんですね。健康的でいいですね」

会話のままならないジャンと違つて、アロンは気さくに話しかけてくれる。対応も優しい。だからついつい後を付いて行くと、ブルース兄様の機嫌が急降下するから困りものだ。

きつとあれだ。弟が自分よりアロンに懐いていることが不満なのだろう。俺に寄ってきてほしければ眉間の皺をどうにかすることだな。

ソファに腰掛けていたブルース兄様は、「いつの間に仲良くなつた」と偉そうに腕を組んだ。

どこからともなく現れるアロンは、俺に微笑むとちよととした世間話をして去つて行くのが常である。人の顔を見るなり眉をひそめるどこぞのお兄様とはえらい違いだ。

「まあいい。こつちに来い」

偉そうにふんぞり返る兄様の後ろに、一人の少年が控えている。

色素の薄い青みがかつた髪を肩のあたりで切り揃えた少年は、同じく薄青の目をしていた。

じつとこちらを窺う彼は、俺と目が合うなり頭を下げる。きよとんとしていると、ブルース兄様が顎あで少年を示す。

「おまえの遊び相手だ。好きに使え」

「初めまして。クレイグの息子のティアンです。どうぞよろしくお願ひします」

大人びた態度で挨拶してきた少年は、にこりと笑みを浮かべる。

穏やかな水面を連想させる不思議な色の瞳を見つめていると、話は終わりとばかりにブルース兄様が立ち上がった。

待て待て。急に話を切り上げるな。

「どうか誰なんだよ、クレイグさん。いきなり紹介されても「あー、あのクレイグさんとこの息子さんね」とはならない。なんせ俺にはユリスの記憶がないので。

それに眼前の少年はどう見ても小学生くらいだ。もしかしたら中学生の可能性もあるが、どうだろう。とにかく子供だ。

「なにか不満でも？」

動かない俺に業を煮やした兄様は、大股で歩み寄ってくる。

「えっと、俺のことはお構いなく」

「遊び相手を用意してやつたんだ。もつと喜べ」

喜びを強要するのはよくないと思います。

「なにが不満だ。顔か？」

「そうじやない」

前々から疑問だつたのだが、俺はどういう奴だと思われているのだろうか。

俺らのやり取りを無言で眺めるティアンは、色白の美少年といった感じだ。ユリスには劣るかもしれないがイケメンの部類だと思う。顔に文句はない。

「だつたらなんだ」
強い口調の兄様に気圧されて、俺は渋々口を開く。
「その、お子様の相手はあんまり得意じゃないので」
「お子様……」
変な顔をするブルース兄様の横で、ティアンが口元を押さえてぽつりと呟く。アロンはなぜか顔を背け、小さく肩を震わせていた。

「なんでおまえがティアンの面倒を見るつもりでいるんだ」
「俺は大人なので」
えっへんと胸を張るが、ブルース兄様は「は？」と訝しむ。なんだ、その顔は。
「十歳児がなに言つてやがる。どう見てもティアンの方が歳上だろうが」
苦々しく呟いたブルース兄様は、ティアンへ向き直つた。
「頼んだぞ、ティアン」
「はい。お任せください、ブルース様」
にこりと愛想よく応じるティアンは十二歳らしい。

「なにをして遊びますか？」
ユリス様

俺よりも高い位置にある頭を見上げていると、ティアンは膝を折つて目線を合わせてくる。

「ユリス様？」

怪訝な顔で再度問い合わせてくるティアン。子供は外で遊んでこい、と兄様に追い出された俺の後

を、当然のように付いてきた。

庭に出たのはいいが、この少年をどうするべきか。突然見ず知らずの子供と遊べと言われても。俺の中身は高校生だぞ。小学生くらいの子供との遊び方なんてわからない。どうにか撒けないだろうか。困つていると、ティアンが俺の手を取つた。

「なんでもいいですよ？」

「じやあ噴水で遊ぶ」

この屋敷、庭にでっかい噴水があるのだ。微妙に聞こえてくる水音に興味をそそられているのだが、ティアンは「それはちょっと」と渋つてしまふ。なんでもいいって言つたのに。

「嘘吐き！」

ビシッと指を突き付けると、ティアンによつて手をおろされてしまう。寒いですよと眉尻を下げるティアンは、俺の手を引いてさりげなく噴水から遠ざかる。

「ユリス様、お庭を見ましよう」

「興味ない」

だだつ広い庭園で立ち尽くす。ギクシャクする俺らを、ジャンが心配そうに見守つている。

「花は嫌いですか？」

「好きとか嫌いとかない。興味ない」

「そうですか」

一瞬だけ肩を落とすティアンは、話題を探すように周囲を見回した。遊具のない庭園である。見渡しても、なにも面白いものはないぞ。

だが、一つだけ俺の興味を惹くものがある。ティアンの袖を引っ張つて、勢いよく上がる水を指さしてみた。

「噴——」

「ダメです！」

きつぱりと断言するティアンに、なぜかジャンが顔を青くする。

うーん。やっぱり小学生の相手は難しい。

噴水を未練たらしく眺める俺の興味を逸らすためか、ティアンは俺の手をとつてじんじん噴水から離れて行く。そんなに噴水ダメ？ 見るくらいよくない？ 俺が噴水でなにをすると思つているんだ。

むすっと歩いていると、見つけてしまつた。芝生に紛れて設置されている変なものを。

ぱつと見は、手のひらサイズのマンホールみたいなものだつた。一定の距離を置いて、庭にぱつ点在している。

暇を持て余していた俺は、勢いよくしゃがんで変な物体を観察し始めた。

「なんですか、これ」

「ティアンも知らないの？」

「初めて見ました」

どうやら一般的なものではないらしい。二人並んで小型マンホール（仮）を覗き込む。

「地雷かな？」

「なんですか、それ」

「え、伝わらないの？」

これはティアンがお子様だから無知なのか、それともこの世界に地雷が存在しないのか。どつちだ。困惑しながら「踏んだら爆発するやつ」と簡潔に説明すれば、ティアンがふむふむ頷いた。「どうして敷地内にそんな危ないものを？ 誰かが誤って踏んだらどうするんですか」確かに。じゃあ違うか。手を伸ばそうとするが、ティアンに止められてしまう。

「危ないものだつたらどうするんですか。見なかつたことにしましよう」

「え、気になる」

あつさり諦めようとするティアンは、こういうものに興味がないのだろうか。噴水や花の件といいティアンとはつくづく趣味が合わない。

「それは騎士団が設置しているものですよ」

そんなとき、横からジャンが口を挟んできた。ジャンが自分から声をかけてくるなんて珍しい。いつもは必要最小限のことしか言わないので。

「てことはやつぱり地雷」

「いえ、そうではなく」

言葉を切ったジャンは、俺の横にしゃがみ込んで小型マンホール（仮）をいじり始める。表面に隠されていた取っ手を立てて、右に捻ると蓋が開いた。中には赤色のボタン。

「騎士団が設置したものです。簡単な魔法が組み込んであるようです」

「魔法！」

この世界、魔法が存在するんだ！ 今まで存在感が一切なかつたから期待していなかつたのに。

「魔法！ 見たい！」

勢いよく振り返った俺に、ティアンが露骨に面倒くさいという素振りを見せた。

「ティアンは魔法使える？」

緩く首を傾げたティアンは「使えますけど」とあつさり肯定した。

「見せて！」

「そんなもの見て面白いですか？」

「面白い！」

明らかにやる気のないティアンであるが、しつこく見たいと騒いでやると「少しだけですよ」と

前置きしてから、渋々見せてくれことになつた。

「特別珍しいものでもないと思いますが」

なにやら両手を組んで意識を集中させる。そうして次に手を離したときには、手のひらから小さな炎が上がつていた。

「おお！」

「こんなのは見て面白いですか？」

面白いに決まつている。魔法なんて初めてだ。テンション上がつて飛び跳ねていると、ティアンが冷たい目で頭を振つた。

「他には？」

もつと色々見せてと両手を上げてお願いしてみる。なんて楽しい世界なのだ。俺も魔法使つてみたい。

「え？ これだけですけど。そもそも魔法なんてあまり役に立ちませんし」

だが、期待に反してそつけなく答えたティアンは、小さな炎を包み込むように両手を合わせて消してしまつ。

「すごく便利じゃん」

「あればちょっと便利だな、程度ですよ」

ティアンの魔法に対する評価が低すぎる。なにもないところから炎を生み出すなんて、それだけ

すごいというのに。

「やっぱり騎士も魔法使つて戦つたりするの？」

「しませんよ。そんなこと。そもそもこんな小さな炎でどうやって戦うんですか。せいぜい相手にちょっととした火傷を負わせるくらいですよ。それも難しいと思いますけど

え？」

耳を疑う俺に、ティアンは形の良い眉をひそめる。

「いやいや。もつと威力を高めればさ」

「そんなのおどぎ話の中だけですよ」

ファンタジー世界の住人がなにか言つてやがる。

「ユリス様。現実を見てください。魔法なんてあつてもなくとも変わりません。実戦においては剣が一番です」

腰に手を当てるティアンが、嘘を言つているようには見えない。

な、なんか思つてたのと違う。この世界の魔法は、あつてもなくとも別にいいや程度の扱いらしい。なんてこつた。

どれだけ腕のいい人でも、先程ティアンが出した炎よりもちょっと勢いあるかなくらいしか使えないらしい。つまりライターの類を持ち歩かなくとも火がつけられる程度の便利さしかないそうだ。微妙すぎる。

水を出せる人もいるらしいが、これも高が知れている。一度で出せる量はコップ一杯にも満たないらしい。なんじゃそりや。せつかく魔法が使える世界に来たのに、おまけくらいの扱いだ。ちよつと、いやかなり期待外れだ。

そんな俺の落ち込み具合を心底不思議そうに眺めていたティアンは、けれども次第に顔を引きつらせる。

「家庭教師を短期間のうちに次々と辞めさせていると聞いたときから、まさかとは思っていたのですが」

「うん？」

「ユリス様は、もうちょっと眞面目に勉強された方がよろしいかもせんね」

それ、俺が馬鹿つて言ってんのか？

確かにね。俺はこっちの世界のことなにも知らないけどね。

でも正直これは助かつたかもしれない。ユリスに成り代わった以上、うまく彼を演じる必要があると頭を悩ませていた。だが、俺が非常識な件については今までのユリスの振る舞いによって勝手にみんな納得してくれている。言い訳を考えなくてよいのは助かつた。

「勉強は嫌い」

「そんなこと言わないで一緒に頑張りましょう」

「どうやら彼も俺が偽物だとはこれっぽっちも考えていないらしい。」

会話が終わるタイミングを見計らっていたのだろう。小型マンホール（仮）の横にしゃがんでいた、ジャンが「どうぞ」と場所を譲ってきた。

「どうぞ？ 押せつてことか？」

ジャンに促されるまま、俺はボタンに手を伸ばす。ティアンも興味津々で覗き込んでいる。

「緊急時の伝達用らしいです」

ジャンの解説に「へー」と相槌を打つ俺の指が、ボタンに触れる。瞬間、隣のティアンが「え」と間の抜けた声を発した。

「ちよつと待ってください。緊急用なんですか？ だつたら押さない方が——」「え？」

「あ」

力チャヤリ。軽い手応えで沈み込んだボタンに、ティアンが静かに口元を覆う。

「それ、押して大丈夫だったんですか？」

それから五分もしないうちに、俺らは騎士に取り囲まれた。

そして俺は決意した。むやみやたらとジャンを信用するのはやめようと。

「おい、ユリス」

顔を上げなくてもわかる。ブルース兄様が、青筋を浮かべて俺を睨み付けているに違いない。

ティアンが遠い目をしている。なんで初日からこんな騒動に巻き込まれなければならないのかと

いう顔だ。

背後では、青い顔のジャンは今にも土下座しそうな雰囲気だった。この世界に土下座という文化があるのかは知らないけど。

「も、申し訳ありません。ブルース様」

地面上に膝を突いたジャンは震える声で謝罪を繰り返している。それを冷やかな目で見下ろす兄様。どうするんだ、この状況。

俺が押した小型マンホール（仮）は、緊急事態を騎士団に知らせるための代物だつたらしい。要するに緊急ブザーだ。魔法が組み込まれており、発信場所が騎士団本部に伝わり、騎士が出動するという仕組み。

当然、俺らは集まつた騎士に囲まれた。その中になぜかブルース兄様もいた。この人は、いつから騎士になつたのか。当然のような顔で混ざるのはやめてほしい。

騎士たちはおおよその事情を察したのだろう。なんとも言えない目がこちらに向けられる。「まあまあ。何事もなくてよかつたじゃないですか。それに、きちんと仕組みが作動するつてこともわかりましたしね。いい訓練になりましたよ。ね？ ユリス様」

ブルース兄様を宥めるアロンが輝いて見える。やっぱり優しい人だ。縋るようにアロンへ近寄ると、その横からガタイのよい男が前に出てきた。

薄青の髪を刈り上げて、表情もキリッとしている。年は三十代後半くらいか。腰に剣を携える姿

は様になつてている。なんというか風格のある男だ。

「申し訳ありません、ブルース様。愚息が付いていながらこのような騒動に」

眉を下げた男は、その視線をティアンへ投げた。それを受け、ティアンが男を指し示す。

「紹介しますね、ユリス様。父のクレイグです」

この状況で父親の紹介なんてするなよ。どういう神経してるんだ、こいつ。

息子の愚行に、クレイグが苦笑する。相好を崩すと途端に親しみやすい雰囲気を醸し出す男だ。『団長のクレイグです。お目にかかるのは初めてでしたね。どうぞお見知りおきを』

てか団長つて。偉い人じやん。そんな人の息子だったのか、ティアン。

「僕も将来、騎士を目指しているんですよ」

隣のティアンが、そんなことを耳打ちしていく。その話、今じゃないとダメ？

「……おい、話を逸らすな」

低い声を出すブルース兄様は、相当お怒りのようだ。再び重い沈黙に包まれる。

「でも押せと言つたのはそこの従者ですよ」

ティアンによる突然の暴露に、ジャンが肩を揺らす。流石お子様。容赦がない。

再び矢面に立たされたジャンの顔面は蒼白だ。ブルース兄様の鋭い視線がジャンを捉えている。

「……ジャン」

「申し訳ありません！」

ガバリと頭を下げるジャンに、アロンが小さく苦笑した。

「まあ、ジャンは従者としての経験が浅いですから。というか新人のジャンをろくに教育もせずに従者に据えたのはブルース様ではないですか」

だから大目に見てやれ、と肩を竦めるアロンはマジで優しい。俺も見習わないと。ジャンを助けるべく、拳を握つてブルース兄様を見上げた。

「そうだよ、兄様。大目に見てあげて」

「押したのはおまえだろうが。なにを他人事みたいに言つてやがる」

「……ジャンに押せつて言われたもん」

「ユリス様!」

うーん、ごめん、ジャン。だつてブルース兄様の目が怖いんだもん。

あつさり引き下がつた俺の腕を、なぜかティアンが得意げに掴んだ。そして胸を張つて宣言する。「ご安心ください！ 今後は僕がきちんと面倒見ておきますので」

「子供に面倒見てもらうのはちょっと」

俺の高校生としてのプライドが許さない。断固拒否させてもらおう。

「いや、だからおまえの方が子供だろうが」

やれやれと息を吐いたブルース兄様は、俺らを見てこめかみを押された。

結論として、ジャンは疲れているのだということになつた。

そりやそうだろう。俺の知る限り、ジャンは文字通り朝から晩まで俺の側にいる。就寝時間くらいしか休みがないのでは。

そんなお疲れのジャンは休むべき、というのがブルース兄様の出した結論だつた。俺がやらかしたことについて、強引に穩便な解決策を見出したようだ。

青ざめた顔でひたすら謝罪するジャンは可哀想だつた。兄様も同じように思つたのだろう。「そんなに気にするな。とりあえずゆつくり休め」と、珍しく優しい言葉をかけていた。

というわけで、本日からジャンはしばらくお休みである。
ジャンにはぜひ心置きなく体調を整えてほしい。

しかしジャンがいない生活なんて俺にできるのだろうか。なんせここは異世界で、まだこちらに来て日にも浅い。これまで、ぼけつとしていればジャンが全部やつてくれていた。

まあどうにかなるだろう。俺の精神年齢は高校生なので、日々の生活くらいはどうにでもなる。朝から気合を入れる俺だったが、前触れなく部屋のドアが開け放たれたことで出鼻を挫かれる。

「おい、ユリス」

「……ブルース兄様」

ノックくらいしるよな、こいつ。

露骨に顔をしかめる俺を気にする素振りも見せず、兄様はズカズカ室内に足を踏み入れる。そし

て今度は、背後に引き連れていた男を顎で示した。

「ジヤンの代わりだ。文句は受け付けないからな」

「は？」

きつぱり言い切ると、兄様はそのままくるりと背を向けて出て行こうとする。

「ちょっと兄様！」

「俺は忙しい。後はそいつに聞け」

慌てて追いかけるが、鼻先で派手な音を立ててドアが閉められた。しんと静まり返る室内。普段は出て行けと言つても根気強く居座るくせに。なんでこんなときだけ素早く出て行くのか。脳筋兄様め。マジで空気が読めないらしい。おそるおそる背後を確認すると、兄様が残していくた男がきちつと頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

淡々とした声は、感情が読みにくい。

騎士団の黒い制服を着ているため騎士であることは間違いない。

二十代後半くらいだろうか。黒髪をさっぱりと整え、仕事ができそうな顔である。真面目な雰囲気で、凛々しい顔立ち。初めて見る顔だ。

「よ、よろしく」

一応挨拶を返しておくと、男が微かに動搖を見せた気がした。そのまま待つてみるが、相手が口

を開く気配はない。兄様が後はこの人に聞けと言つていたのだが、説明する気はないらしい。

うーん、困った。これはジヤン以上にコミュニケーションが難しい人かもしれない。

だが、なんとかなるだろう。要はジヤン不在の間、俺の世話を任せられた人つてことだ。ジヤンと同じように接していればいい。

……そう思つていたのだが、ブルース兄様が置いていった騎士は無口なんてものじゃなかつた。マジでなにも喋らない。

俺が着替えに困ると無言でそつと手を貸してくれるし、椅子も引いてくれる。しかし喋らない。ジヤンの方がマシだ。ジヤンは会話こそままならないが、反応は返してくれる。大抵は苦笑いのようなものだけだ。

この騎士は終始無表情で、いまだに名乗つてすらくれない。何度も名前を尋ねてみたのだが、諭しむような目を向けられるだけで教えてもらえない。

俺、嫌われんのか？ 初対面なのに？

ジヤンには心置きなく休暇を楽しんでこいと言つたが撤回したい。早く帰ってきて。頼みのティアンが来たのは、昼食を終えた頃だつた。

「ここにちは、ユリス様」

「遅い！」

「なんですか？ 急に」

ぱちぱちと目を瞬くティアンは、まったくわからないという顔をしている。

「もつと早く来い」

「無理ですよ。僕、朝は勉強があるので。むしろなんでユリス様はいつも暇そうなんですか？」

「暇じゃない。忙しい」

「まあ、そういうことにしておいてあげてもいいですけど」

上から目線で言つてのけたティアンは、壁際に佇む例の騎士を落ち着きなく観察している。

「あの従者はどうしたんですか？」

「しばらくお休み。ジャンは疲れてるから」

「なるほど。クビにしたんですね。いいんじやないですか」

こいつ人の話聞いてないのか？ クビじやなくて休暇だつて言つてるだろうが。

訂正するが、ティアンは不思議そうな顔をしている。なにその顔。

「で？ あの人は？ まさかこれから処刑でもするんですか？」

「しないよ!?」

びっくりした。急になにを言い出すんだ。

驚きのあまり大声を出せば、ティアンが「え」と驚愕した。なんでおまえが驚くんだ。

「でもあの人、元副団長ですよね。なんでここにいるんですか？」

今更こそそこそこと小声になるティアンの言葉に耳を疑う。

「え、あの人。副団長なの？」

「いや、元ですよ。元。もちろん今は違います。もしかして従者の代わりですか？」

なにがもちろんなんだ。てか、今は違うつて。なんで？

「そうだよ。ブルース兄様がそう言つてた」

「ああ、なるほど」

なにやら納得顔で頷いたティアンは、それきり騎士への興味を失つたようだ。

副団長といえば、なにかあつたんじゃなかつたか？

アロンが副団長云々と口を滑らせていたことを思い出した俺は、元副団長だという騎士を観察する。変な人には見えない。無口すぎるという欠点はあるけどね。

「副団長つてなにがあつたの？」

「え」

動きを止めるティアンは「なんでそんなこと訊くんですか」と困ったように俺と騎士を見比べる。やがて「そういえば」と椅子に座つた。

「明日から新しい家庭教師が来るそうですね。これで何人目ですか？」

「ねえ。副団長は？」

「そろそろ真面目にお勉強した方がいいですよ」

露骨に話題を逸らすティアンに、息を吐く。どうやら副団長の件は迂闊に口にできない事情があ